

○感覚器障害研究

研究課題	実施期間	合計金額 (千円)	主任研究者所属施設	氏名	(1) 専門的・学術的観点 ア 研究目的の成果 イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義	(2) 行政的観点 ア 期待される厚生労働行政に対する貢献度等。(事例により説明してください。審議委員資料、予算要求規定の基礎資料としての活用予定などを含む。)	(3) その他の社会的インパクトなど(予定を含む)	発表状況 原稿 論文 (件)	口頭 発表 等 (件)	特許 の出願及 び取扱い 状況	発表 反 映 件 数	(4) 普及・啓発活 動件数(一般国民 へのパンフレット 作成、講演・シン ポジウム開催、研 究の成果が分か るホームページの URLなど、それぞ れ1件と数える)
視覚代替機器の網膜への移植と視覚再生に関する基礎研究	平成13-15年度	59,600	東北大学大学院医学系研究科感覚器病態学講座眼科科学分野	玉井 慎	我々が製作した積層型人工網膜チップは網膜に応じた電気刺激の伝導を再定でき、クサヤ網膜内に移植可能であることが明らかになった。一方、このチップの上で培養予定の神経細胞(RGC)はチップ素材で生存状態は変わり、神経突起の延長もさまたげであった。RGCではBDNFによってリン酸化されたTrkBリセプターにN-She/SheCが結合し、MAPKやPI3Kの両方のシグナル系が活性化されることが明らかになった。しかし、これ以外のシグナル経路があることも判明した。	失明による経済的損失は回りきれないものがあるにもかかわらず、原因疾患は原因不明で行われている。治療についての研究は進んでいる。遺伝子治療や幹細胞移植は倫理的な問題もあり、なかなか進んでいない。Microtechnologyを組み合わせた人工視覚の発達はこれらに変わる可能性を秘めた新しい治療法になる可能性がある。我々の研究は光感受性細胞である網膜がすべて消失しても光刺激を網膜に伝達できることのできる人工チップの基礎研究である。	網膜疾患による失明では、原因疾患によりさまざまな網膜障害の程度が想定される。現在世界中で積極的に行われている人工網膜の臨床試験は網膜の一部が消失して初めて適応になる機器である。我々がめざすものは網膜のいかなる障害にも対応できる新しい人工網膜の開発であり、実現すれば完全な失明は大幅に減少させることが可能になる。	58	49	91	1	0
ドライアイ発症機序の解明および治療用人工涙液の開発研究	平成13-15年度	44,200	東京歯科大学眼科	坪田一男	アルブミンなどの血清中因子を主体とした人工涙液の開発に関する基礎的なデータがそろった。また乾燥に対する有効な因子も見いだすことができた。目的はほぼ達成されたと言える。ドライアイ治療に自己血清が有用であることは以前より知られていたが、その機構については明確ではなかった。有効な因子が明確化されたことは研究上重要な成果である。また乾燥の影響によりIL-6が分泌され、ドライアイの発症に関与していることが明らかにされたことは、ドライアイの治療に有用である。	ドライアイ患者は年々増大し、新しい治療法が求められている。本研究によって得られたドライアイ治療用人工涙液の基礎的なデータは人工涙液開発および臨床応用に関して非常に有用であり、早期開発が望まれる。	眼の乾燥状態に関する物質をいまだにさがすことができ、これを用いた人工涙液の開発が期待できる。さらにこれをベースにしてアルブミンなどの有効因子を加えた人工涙液の開発も望まれる。	12	0	21	3	0
糖尿病網膜症の発生メカニズムに関する研究	平成14-15年度	14,800	札幌医科大学医学部病理学第二講座	澤田典尚	糖尿病網膜症に対し、1.リアプ細胞の形質を正常化する物質、2.血管内皮細胞に対しては、PKA活性化物質が有効であることが示唆された。この研究成果は、Exo Cell などで発表された。	本研究は、基礎研究であり、現在のところ行政に直接反映するものではない。	糖尿病患者が近い将来一千万人を超えることが予想されている。現在でも、糖尿病網膜症は我が国における後天性失明原因の第一位を占め、年間数千人が失明していると言われている。本研究の成果は、サイト結合機能を正常状態にまで高めるという根治療法の実現に大きく寄与すると考えられ、糖尿病網膜症による後天性失明を減らすことと期待される。	17	4	17	0	0
経鼻コイルにより耳小骨を直接加振する新駆動方式Hr-所補聴システムの開発に関する研究	平成14-15年度	18,000	電気通信大学電気通信学部	小池道二	耳小骨に伝わる振動を伴わない、高効率高容量の耳小骨直接加振型補聴器の基本原理と製作機を開発した。成果は、the Association for Research in Otolaryngology of the MidWinter Meeting等で発表し、多くの反響を得た。		新駆動方式の普及への確実な実証方法が確立されれば、従来の埋込み型補聴器よりも適用範囲を大きく拡大することができる。	3	4	8	1	0

○感覚器障害研究

研究課題	実施期間	合計金額 (千円)	主任研究者所属施設	氏名	(1) 専門的・学術的観点 ア 研究目的の成果 イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義	(2) 行政的観点 ア 期待される厚生労働行政に対する貢献度等。(事例により説明してください。審議委員資料、予算要求規定の基礎資料としての活用予定などを含む。)	(3) その他の社会的インパクトなど(予定を含む)	発表状況 原稿 論文 (件)	口頭 発表 等 (件)	特許 の出願及 び取扱い 状況	発表 反 映 件 数	(4) 普及・啓発活 動件数(一般国民 へのパンフレット 作成、講演・シン ポジウム開催、研 究の成果が分か るホームページの URLなど、それぞ れ1件と数える)	
視覚障害者・盲ろう者のための非視覚的コンピュータオペレーティングシステムの開発	平成15年度	7,890	静岡県立大学国際関係学部	石川 暁	音声読み上げ機能と点字表示機能を実装した日本語対応Linuxオペレーティングシステム用スクリーンリーダー(プロトタイプ)を初めて開発することに成功した。		一般的にはわが国のアンステイティブテクノロジー(支援技術)の研究・技術水準の向上に寄与できた。具体的にはLinuxスクリーンリーダーをさらに本格的なものに仕上げるとともに、Linuxで動作する音声・点字インターネット・ブラウザ、メール・ユーザーエージェント、エディタの開発を行い、視覚障害者にとって理想的なコンピュータ操作環境を実現する。	0	0	2	なし	0	(有)エクストラHP http://www.extrasoft.jp/ 0-KGSアクセシビリティフォーラム (平成16年5月21日)にて、成果報告予定
中途視覚障害者の職場復帰のための包括的対応策の確立	平成13-15年度	17,280	国立身体障害者リハビリテーションセンター 第三機能回復訓練部	森島 謙次	ロービジョン者の読み速度の状況がわかったこと、訓練の評価やマニュアルが作成されたこと、移行訓練の予測も可能となったこと、視覚障害者の職場の待機もわかったことなどから、中途視覚障害者の職場復帰を大規模に促進する可能性が高まった。中途視覚障害者の職場復帰を阻害している要因として一番のものは、視覚障害者が仕事でパソコンを十分活用できる環境がないことである。技術が進歩しているにもかかわらず、視覚障害者が職場でパソコン等の機器を活用しようとする、かなりの工夫であり完全に活用できない状況であったので、細かい対応策検討と有効な支援制度確立が必要である。	ロービジョンクリニックを受診したロービジョン者に対して医療(ロービジョンクリニック)から生活訓練、そして職能訓練を結びつけること、比較的短期間で職場復帰できる可能性のあることが実証された。ロービジョンクリニックでの職業により、視覚障害者用の道具(音声電卓など)の利用で業務の継続が可能となり、さらに職能訓練(パソコン)でワープロや表計算ソフトの利用が可能となり業務の効率化がなされ、職能を失ったケースがあった。また、生活訓練(歩行訓練)や職能訓練(ワープロや表計算ソフト)の訓練、その後のフォローアップでメールを用いた在宅就労が可能となったケースもあった。一方、就労している視覚障害者や経営者への調査および外部の就労状況調査の結果では、職場復帰を阻害している最大の要因は、視覚障害者が仕事でパソコンを十分活用できる環境にないことであると考へられた。また、日本の就労体制は他国よりも良好であった。しかし、パソコンを用いる職場ではパソコンを十分活用できる環境にないため、その活用は本人の努力に依存している一面もあり、細かい対応策の検討と有効な支援制度の確立が必要であることが認められた。	今までつながらなかった医療、生活訓練、職能訓練を結びつけることによって、比較的短期間での社会復帰の可能性が出てきた。生活訓練、職能訓練は長期の期間が必要であるが、評価方法や訓練内容等の裏付けにより、比較的短期間での訓練が可能となったからである。さらに、ロービジョン者への医療や生活訓練および職能訓練の重要性も明らかになった。	0	0	4	0	2	0

研究課題	実施期間	合計金額 (千円)	主任研究者所属施設	氏名	(1) 専門的・学術的観点 ア 研究目的の成果 イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義	(2) 行政的観点 ア 期待される厚生労働行政に対する貢献等(実例により説明してください。審議委員資料、予算要求策定の基礎資料としての活用予定などを含む。)	(3) その他の社会的インパクトなど(予定を含む)	発表状況			特許 出願及び 取得 状況	審査 反映 件数	(4) 普及・啓発活 動件数(一般国民 へのパンフレット 作成、講演・シン ポジウム開催、研 究の成果が分か るホームページの URLなど、それぞ れ1件と数える)
								原書 論文 (件)	口頭 発表 (件)	その他 論文 (件)			
結核細菌感染症の広域的・散発的発生時の実地疫学的・調査手法の開発を目的として、次の研究を行った。(1)腸管出血性大腸菌O28,0111に関するゲノムデータの作成。(2)チフス菌(Salmonella enterica serovar Paratyphi A)のバルスフィールド電気泳動法による遺伝子型パターンデータベース作成。(3)薬剤耐性Salmonella TyphimuriumおよびSalmonella Enteritidisに関する分子疫学マーカーのデータベースの構築。(4)食中毒事件発生時の疫学調査の現状及び事件発生に関する保健所への調査。(5)東京都における食中毒発生に基づく調査体系の検討。(7)内外の食中毒事例における疫学調査方法に関する情報の収集。(8)米国・英国における結核細菌感染症サーベイランスシステムの検討。(9)事例を用いた食中毒疫学情報への有効活用に関する研究。(10)潜在する地域流行の疫学調査の検討に関する研究。	平成14-15年度	380,000	自治医科大学医学部公衆衛生学教室	中村好一	結核細菌感染症の広域的・散発的発生時の実地疫学的・調査手法の開発を目的として、次の研究を行った。(1)腸管出血性大腸菌O28,0111に関するゲノムデータの作成。(2)チフス菌(Salmonella enterica serovar Paratyphi A)のバルスフィールド電気泳動法による遺伝子型パターンデータベース作成。(3)薬剤耐性Salmonella TyphimuriumおよびSalmonella Enteritidisに関する分子疫学マーカーのデータベースの構築。(4)食中毒事件発生時の疫学調査の現状及び事件発生に関する保健所への調査。(5)東京都における食中毒発生に基づく調査体系の検討。(7)内外の食中毒事例における疫学調査方法に関する情報の収集。(8)米国・英国における結核細菌感染症サーベイランスシステムの検討。(9)事例を用いた食中毒疫学情報への有効活用に関する研究。(10)潜在する地域流行の疫学調査の検討に関する研究。	地域における今後の結核細菌感染症(食中毒)発生時の対応について、参加者による提言とデータの提供を行った。	地域における今後の結核細菌感染症(食中毒)発生時の対応について、今後の方向性を示すように研究が進展した。	5	4	10	0	0	0
ツベルクリン検査、BCG等に代わる結核等の抗酸菌に対する新世代の診断技術及び予防技術の開発に関する研究	平成13-15年度	112,000	国立感染症研究所 病原微生物部	牧野正彦	ワクチン候補分子を2種類(MMP-1及びリポタンパクLaK)特定した。共に自然免疫・獲得免疫を賦与した。LaKを構成する脂質と蛋白の生体防御反応経路上の役割を明らかにした。宿主細胞に寄生性感染した抗酸菌に対する免疫療法を開発した。新規結核感染補助診断法を開発した。非結核性抗酸菌に対する遺伝子診断及び血清診断法を開発した。これらは、国際誌に報告すると共に日本語版論文で発表し大きく評価された。	BCGに代わる樹状細胞を標的とする新しい成分ワクチン法の開発が可能となり、国民の抗酸菌感染症に対する恐怖を払拭し得る可能性が開けた。新規に特定したmRNA遺伝子を用いることで、従来不可能であった高感度・特異性・抗原性抗酸菌の鑑別を初めて可能とし、かつ感度・特異性に優れたGPIを用いた非結核性抗酸菌感染症の血清診断法を確立した。確立診断までの無菌の治癒と患者の社会活動の復帰を不棄とし、医療上の適用効率向上に直接的に繋がる。	抗酸菌に対する抗酸菌コリネントワクチンを可能とする新たな分子の同定は、世界をリードする研究成果である。非結核性抗酸菌の遺伝子診断法及び血清診断法の開発は、本研究で初めて開発に成功したものであり、日本語キットの開発に繋がる。両者は共に緊急なため、抗酸菌感染症が多発・重複する発展途上国でも使用可能なキットの開発に発展させ得る。	19	9	38	0	1	0

研究課題	実施期間	合計金額 (千円)	主任研究者所属施設	氏名	(1) 専門的・学術的観点 ア 研究目的の成果 イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義	(2) 行政的観点 ア 期待される厚生労働行政に対する貢献等(実例により説明してください。審議委員資料、予算要求策定の基礎資料としての活用予定などを含む。)	(3) その他の社会的インパクトなど(予定を含む)	発表状況			特許 出願及び 取得 状況	審査 反映 件数	(4) 普及・啓発活 動件数(一般国民 へのパンフレット 作成、講演・シン ポジウム開催、研 究の成果が分か るホームページの URLなど、それぞ れ1件と数える)
								原書 論文 (件)	口頭 発表 (件)	その他 論文 (件)			
野生げっ歯類及びダニ類に由来する感染症の予防、診断及び疫学に関する研究	平成13-15年度	86,900	北海道大学大学院獣医学研究科	高島島夫	ア 研究目的の成果 「ダニ媒介性脳炎とハンタウイルス感染症の精度の高い診断法を確立して、疫学調査に応用できた。ヒトのバベシア感染症の初発例の感染源として献血者の血液を調査するとともに病原動物(アカネズミ)と媒介ベクター(ヤマトマダコシジメマダコ)を特定した。イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義 研究成果は海外の学術雑誌(24編)と国内の雑誌(6編)に公表し、国際的に高い評価を受け、国内からも反響があった。	ダニ媒介性脳炎とハンタウイルス感染症の流行地であるロシアおよびヨーロッパ諸国への旅行者へ疫学情報を提供した。2001年9月にオーストリアで日本人男性のダニ媒介性脳炎による死亡例の健康危険情報発信するとともに、感染症発生週報(DWR)2002年第4号に情報を提供した。またワクチンによる具体的予防対策を提案した。輸入野生げっ歯類を対象としたハンタウイルス感染症の検査体制を整えた。わが国のヒトのバベシア症の初発例の感染源が不顕性キャリアーであると特定した。	近年世界各地で野生動物、ダニ類や蚊などに由来する感染症が新たに出現し、人畜を恐怖に陥れている。今後ともこの種の新興感染症の制御を目的とした調査・研究が国際的にも国内においても益々必要となって来ている。	原書論文(件) 24	6	63	0	1	普及・啓発活動件数 16件: ホームページ3件 http://www.hokudai.ac.jp/veteri/coe/ http://www.hokudai.ac.jp/veteri/DC/Graduate.School.html http://www.hokuknet/sinpojium3 件、講演10件
結核ワクチン開発の基盤となるアジュバントに関する研究	平成13-15年度	36,000	東京大学医学部研究所 炎症免疫学分野	清野 宏	次世代ワクチンとして期待される「結核ワクチン」実現化には結核免疫機構を介して免疫増強が得る「結核アジュバント」の開発が不可欠である。その目的達成に向けて、コラーゲンの結核免疫増強効果に着目し、その誘発を欠損させた無毒化変異型CTの結核アジュバント効果とその細胞・分子機構についての確認と説明を導いた。さらに、その結果を基盤に第2世代としてのキメラ型(mCT-A/LT-β)の開発に成功し、その結核免疫増強効果を確認した。この一連の成果は結核アジュバント開発に関連した結核免疫機構の基礎的解明にも貢献し、3年間の研究期間に50編の論文を免疫、感染、ワクチン関係国際学術誌(平均インパクトファクター約6.0)に報告し、高い評価を得た。	再興・新興感染症対策の大きなテーマとして安全で効果的かつ接種の障りないワクチンの開発が、その国への普及を考えた時必須である。その観点から近年その免疫学の意義が明らかになってきた結核免疫機構を駆使した「結核・結核ワクチン」の開発が世界的にも期待されている。そこで、本研究計画はその切り口となる結核免疫機構の基礎的解明とそれを基盤とした結核アジュバント開発に向けた最初の本格的取り組みとして立ち上げられ無毒化変異型とキメラ型アジュバントの開発とその免疫増強効果確認という大きな成果をあげた。この成果を基盤に次のステップとして臨床応用を目指した研究展開への大きな道筋をつけた。	世界で初めて結核アジュバント効果の知られているコラーゲンと無毒化変異型を含有させた無毒化キメラ型アジュバントの開発に成功し、「結核・結核ワクチン」開発に向けて新機軸の可能性を提供した。	50	15	50	2	0	

○エイズ対策研究

研究課題	実施期間	合計金額 (千円)	主任研究者所属施設	氏名	(1) 専門的・学術的観点 ア 研究目的の成果 イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義	(2) 行政的観点 期待される厚生労働行政に対する貢献度等。(事例により説明してください。書籍・資料、予算要求策定の基礎資料としての活用予定などを記す。)	(3) その他の社会的インパクトなど(予定を含む)	発表状況			特許の出願及び取得状況	施策 反映件数	(4) 研究の成果が分かるホームページのURLなど
								原稿論文(件)	その他論文(件)	口頭発表等(件)			
HIV及びその関連ウイルスの増殖機構及び増殖制御に関する研究	平成13-15年度	287,278	国立感染症研究所 遺伝子解析室	佐藤裕徳	ア)HIV免疫不全ウイルス(HIV)複製・実質の制御要因を新たに複数見出した。イ)学術成果はいずれも水準が高く、国際的にインパクトの高い学術論文雑誌 Proc. Natl. Acad. Sci. USAに2誌、Journal of Virologyに16誌、他多数のウイルス学(Virology等)、ならびに生化学(Journal of Biological Chemistry等)の国際的な学術専門誌に掲載された。特にHIV buddingの研究は高い学術水準にあるとの国内外評価を得た。これらの研究成果は、国内HIV研究の礎となり、世界的HIVウイルス学の進展に貢献するとともに、我が国のHIV基礎研究の水準の向上を立証した。	新たな作用をもつ抗HIV薬開発に必要かつ不可欠な基礎ウイルス学情報を蓄積した。ランダムスクリーニングが可能な抗生物質と質なり、抗ウイルス薬開発には、増殖様式を分子レベルで正確に理解する必要がある。HIV感染は世界人口の約1%にまで広がっており、社会的影響が著しく大きい。しかし、世界的に見ても完全な治療はまだ無く、また我が国で独自に開発された抗HIV薬も無い。このような状況下で新規薬剤の開発の進展が期待される本研究の成果は、将来、国内のエイズ対策行政に大きなインパクトを与えるのみならず、世界の保健医療環境・社会経済環境の向上に大きなインパクトを持つ。	抗HIV薬開発の過程で得られる種々の基礎知見、解析手段、あるいは研究戦略は、今後の抗ウイルス薬開発一般に還元し、これを促進するための重要な基礎情報となる。ウイルス感染による新興再興感染症は今後大きな社会問題となることが予想される。このような状況下において、HIVのみならず、他のウイルスに対する抗ウイルス薬の開発は、世界の保健医療行政に大きなインパクトを与える。抗ウイルス薬開発に関しては、HIVに対するものが最先端を行っており、世界規模でのウイルス感染症を制御するための先駆的モデルケースの役割を果たす。	169	44	189	5	0	0
エイズ対策研究事業の企画と評価に関する研究	平成15-15年度	28,829	国立感染症研究所 エイズ研究センター	山本道研	研究計画委員会と研究推進委員会を開設し、公募研究課題案と組織の設定、研究成果の評価などの項目について検討し、選定を行った。これにより、国内外からも評価される研究が数多く生まれた。	成果の有効利用により、得られたリソースとしての研究費がエイズ対策研究事業に適正に使用、配分されるようになった。	HIVの感染や医療体制、さらにはリスクグループの感染予防に押し進めを行い、有効に活用されている。	7	0	0	0	0	
薬剤耐性のモニタリングに関する技術開発研究 ※1・2	平成13-15年度	100,000	国立感染症研究所 エイズ研究センター	杉浦 五	この研究では抗HIV-1薬物の血中および細胞内における濃度をモニタリングする測定技術開発、薬物動態に影響を及ぼす遺伝子の解析を行い、抗HIV-1薬物動態の詳細を明らかにした。研究成果はHIV-1感染治療現場において応用され、薬剤耐性HIV-1症例の治療あるいは副作用の軽減に効果を示した。これは種々の感染に対するテーラーメイド医療実現への一歩として好評を得た。	薬剤耐性HIV-1に対する作用はHIV-1感染の化学療法を適切に進めるための重要な情報となっている。成果のうち有用レベルに達している部分に関してはホームページによる情報公開・推進の受付等を行っておりHIV-1感染者の治療支援に貢献している。	今まで薬物の細胞内濃度の測定は、解作用に合成された同位体標識薬剤が主に用いられており、実際のHIV-1感染者での解析は困難であった。我々は細胞内からの新たな薬剤抽出法を構築し、HPLCあるいはLC-IMS/MSを用いた測定系の確立に成功した。このような技術的な打開はこれからこの分野の研究を進展させていく上で大きな意義を持つ。	42	15	121	2	0	0
HIVによる新しい宿主免疫回避機構に関する基礎研究	平成15年-15年度	10,500	聖マリアンナ医科大学	草野秀一	cDNAを形質移入した実験により、HIV TatがPL-Scramblaseの細胞内分布を変化させ且つ分解を促進することが明らかになった。また、HIV感染細胞においては、TNF- α およびTIPAIによるPL-Scramblaseの発現誘導がまったく起こらないが、遅れて起こることが明らかになり、Tatタンパク質の新たな機能を示唆することができた。	本研究の成果から、TatとPL-Scramblaseの相互作用は抗HIV薬の新たなターゲットになりうる可能性を示すことができた。	PL-Scramblaseはウイルスの持続感染維持の鍵的因子となりうる可能性が示唆された。これは、全く新しい概念であり、他の持続感染を誘発するウイルスであるヘルペスウイルスにおける類似タンパク質としての研究を開始している。	0	0	1	0	0	0

○肝炎等克服緊急対策研究

研究課題	実施期間	合計金額 (千円)	主任研究者所属施設	氏名	(1) 専門的・学術的観点 ア 研究目的の成果 イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義	(2) 行政的観点 期待される厚生労働行政に対する貢献度等。(事例により説明してください。書籍・資料、予算要求策定の基礎資料としての活用予定などを記す。)	(3) その他の社会的インパクトなど(予定を含む)	発表状況			特許の出願及び取得状況	施策 反映件数	(4) 普及・啓発活動件数(一般国民へのパンフレット作成、講演・シンポジウム開催、研究の成果が分かるホームページのURLなど、それぞれ1件と数える)
								原稿論文(件)	その他論文(件)	口頭発表等(件)			
C型肝炎の自然経過および介入による影響等の評価を含む疫学的研究	平成13-15年度	163,911	広島大学大学院疫学・疾病制御学	吉澤浩司	(1)HCVキャリアの自然経過の解析結果、ウイルス血清学的調定成績を元に、合理的なウイルス肝炎対策を推進するための「病因論に基づいた肝炎、肝がん対策」のあり方を提示した。(2)ウイルス・血清学的手法により、透析患者集団におけるHCV感染の実態(prevalence rate, incidence rate)を把握し、透析施設における感染予防対策策定のための基礎となるデータを提示した。(3)チンパンジーを用いた感染実験を行い、感染成立に必要な最小のHCV量(絶対量として20コピー相当)を決定した。HCV感染初期におけるHCVの増殖速度(doubling time 6.3-8.8時間、log time 1.3日-1.8日)を決定した。(4)日本国内におけるC型肝炎症例から得られたHEV株を解析し、「日本固有株」と呼ばれるHEV株が国内に存在することを初めて明らかにした。(5)HEVの組み替え中空粒子をHEV感染診断のための特異度の高い測定素を確立した。	(1)本研究が提示した各種のデータ、および「病因論に基づいた肝炎、肝がん対策」の概念を基礎として、平成14年度より全国規模での「肝炎ウイルス検診」が実施に移された。(2)透析施設におけるHCV感染対策を策定するために役立つことが可能である。(3)チンパンジーの感染実験によって得られた成果は、血液の総合安全対策策定のために役立つことが可能である。(4)C型肝炎についての社会対応が必要となったことから、平成15年度からは新たに「C型肝炎」に関する研究「班」が本研究班より分離独立して研究が開始されており、成果を挙げつつある。	5年計画で開始された「肝炎ウイルス検診」は、ほぼ軌道に乗り順調に効果を上げ始めている。	68	50	69	0	0	0
C型肝炎ウイルスの感染に対する治療の標準化に関する基礎研究	平成13-15年度	140,000	虎の門病院 消化器科	藤田博光	ア)全国でC型肝炎の疫学調査を施行しC型肝炎ウイルスのgenotypeおよびvirus量から4群に分類した治療の標準化に関するガイドラインを作成し、日本におけるC型肝炎治療の水準を確立した。イ)C型肝炎ウイルスの感染経路の明確化が可能となり、近未来的に肝臓の死産率の減少が期待される。	C型肝炎ウイルスの感染の撲滅を全国の都道府県に調査を依頼し潜在的な感染者を把握し、肝臓専門病院へ迅速な移行と治療のネットワークの構築した。その中でインターフェロンに活用するための短期的治療群、標準的治療群、難治群に分けてIFN投与期間、併用療法を決めた。また、IFN無効例、非適応例に対する治療法についても治療のガイドラインを作成した。今後、本ガイドラインを中心に全国的環境で治療が進められ、医療経済への効率的還元、効果的な治療法の開発・確立へつながるものと期待できる。	C型肝炎に対する治療の標準化がガイドラインにより日本全国標準的治療を受けられるようになった。	71	21	99	0	0	347

○免疫アレルギー疾患予防・治療研究

研究課題	実施期間	合計金額 (千円)	主任研究者所属施設	氏名	(1) 専門的・学術的観点 ア 研究目的の成果 イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義	(2) 行政的観点 ・期待される厚生労働行政に対する貢献度等。(事例により説明してください。申請書資料、予算要求決定の基礎資料としての活用予定などを記す。)	(3) その他の社会的インパクトなど(予定を含む)	原書論文 (件)	その他論文 (件)	口頭発表 (件)	特許 の出願及び 取得 状況	産学 連携 件数	(4) 普及・啓発活動 件数(一般国民へのパンフレット作成、講演・シンポジウム開催、研究成果が分かるホームページのURLなど、それぞれ1件と数える)
遺伝子情報に基づいた抗原ペプチドによるアレルギー疾患の予防	平成13-15年度	52,000	慶応義塾大学 医学部	浅野浩一郎	アレルギー関連抗原の免疫応答性を規定する遺伝子について動物モデルを用いた解析。生体内での抗原ペプチドの免疫応答性に関する解析(免疫応答性)など多面的な解析が行われた。また、RPA、プロスタグランジンの免疫応答性について興味深い遺伝子多型の発見とその機能解析が行われた。 イ 研究成果の一部はPharmacogenetics誌、J Biol Chemなどに発表され、国際的に注目された。	今後さらに研究が進んだ時点で、その成果が治療ガイドラインに反映されることが期待される。	本研究で進められた多面的アプローチでの遺伝子解析に関する解析は今後のターゲットが選定された際の研究のひとつのモデルになると考えられる。	8	22	72	2	0	0
気管支喘息の発症と免疫応答の増進に及ぼすウイルス感染の分子生物学的メカニズムに関する研究	平成13-15年度	61,000	昭和大学医学部 小児科	小田島安平	ウイルス感染がどのようにアレルギー疾患に関与するのかが基礎的かつ重要な課題である。今回の研究ではウイルス感染が気管支喘息の発症や増進に重要な役割を担っていることが明らかになり、中でもライノウイルス、RSウイルスが重要であることが認識された。また、ウイルス感染後に気管支喘息発症後に起こる免疫学的機序を明らかにした。	気管支喘息の増進メカニズムがいくつも発表されているが、ウイルス感染を介して起こるメカニズムは不明瞭である。今回の研究では、ウイルス感染が気管支喘息の発症や増進に重要な役割を担っていることが明らかになり、中でもライノウイルス、RSウイルスが重要であることが認識された。また、ウイルス感染後に気管支喘息発症後に起こる免疫学的機序を明らかにした。	喘息の発症に遺伝子の影響、また免疫学的機序が重要な課題とされているが、今回の研究では、ウイルス感染が気管支喘息の発症や増進に重要な役割を担っていることが明らかになり、中でもライノウイルス、RSウイルスが重要であることが認識された。また、ウイルス感染後に気管支喘息発症後に起こる免疫学的機序を明らかにした。	4	10	6	0	0	2
関節リウマチの治療反応性遺伝子の発見と新規治療薬の開発に関する研究	平成13-15年度	94,000	埼玉医科大学総合医療センター	竹内 勤	関節リウマチ治療薬の中で最も効果的とされるメトトレキサートとTNF阻害剤の併用療法に関する遺伝子多型解析を行った。関節リウマチ治療薬の中で最も効果的とされるメトトレキサートとTNF阻害剤の併用療法に関する遺伝子多型解析を行った。関節リウマチ治療薬の中で最も効果的とされるメトトレキサートとTNF阻害剤の併用療法に関する遺伝子多型解析を行った。	これまで治療薬が承認されてきたメトトレキサートとTNF阻害剤の併用療法に関する遺伝子多型解析を行った。関節リウマチ治療薬の中で最も効果的とされるメトトレキサートとTNF阻害剤の併用療法に関する遺伝子多型解析を行った。	疾患率は50%増加に達する可能性がある。関節リウマチ治療薬の中で最も効果的とされるメトトレキサートとTNF阻害剤の併用療法に関する遺伝子多型解析を行った。	65	100	107	2	53	10

○免疫アレルギー疾患予防・治療研究

研究課題	実施期間	合計金額 (千円)	主任研究者所属施設	氏名	(1) 専門的・学術的観点 ア 研究目的の成果 イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義	(2) 行政的観点 ・期待される厚生労働行政に対する貢献度等。(事例により説明してください。申請書資料、予算要求決定の基礎資料としての活用予定などを記す。)	(3) その他の社会的インパクトなど(予定を含む)	原書論文 (件)	その他論文 (件)	口頭発表 (件)	特許 の出願及び 取得 状況	産学 連携 件数	(4) 普及・啓発活動 件数(一般国民へのパンフレット作成、講演・シンポジウム開催、研究成果が分かるホームページのURLなど、それぞれ1件と数える)
関節リウマチの発症と免疫応答の増進に及ぼすウイルス感染の分子生物学的メカニズムに関する研究	平成12-15年度	89,000	高橋大学大学院 薬学総合研究科	江口 勝美	1) RAの発症と免疫応答の増進に及ぼすウイルス感染の分子生物学的メカニズムに関する研究。 2) RAの発症と免疫応答の増進に及ぼすウイルス感染の分子生物学的メカニズムに関する研究。 3) RAの発症と免疫応答の増進に及ぼすウイルス感染の分子生物学的メカニズムに関する研究。	1. 臨床検査、MRI画像、遺伝子解析、関節炎の診断からみた早期診断と治療の予測。 2. RAの発症と免疫応答の増進に及ぼすウイルス感染の分子生物学的メカニズムに関する研究。 3. RAの発症と免疫応答の増進に及ぼすウイルス感染の分子生物学的メカニズムに関する研究。	1. RAを早期に診断することは、これまでには不可能とされてきた。私たちがRAに特異的な強い抗CCP抗体とRFを併発している患者を早期に診断することによって、RAは早期に適切な治療を受けることができ、病状の進行を遅くし、関節破壊を抑制し、生活の質を向上させることが期待される。	75	131	273	97	5	20
関節リウマチの発症と免疫応答の増進に及ぼすウイルス感染の分子生物学的メカニズムに関する研究	平成13-15年度	50,000	京都大学 医学部	白川 亮	(1) 専門的・学術的観点 ア 研究目的の成果 イ 研究成果の学術的・国際的・社会的意義	(2) 行政的観点 ・期待される厚生労働行政に対する貢献度等。(事例により説明してください。申請書資料、予算要求決定の基礎資料としての活用予定などを記す。)	(3) その他の社会的インパクトなど(予定を含む)	194 (内英文8)	92 (内国際シンポジウム9)	2	6	22	